

## 第3回いわき市震災メモリアル検討会議 議事録

<b>会議名</b>		第3回いわき市震災メモリアル検討会議	
<b>開催日時</b>		2015.8.7(金) 14:00~16:30	<b>開催場所</b> いわき市議会棟 第6委員会室
<b>参加者</b>	<b>検討委員</b>	石丸委員長、福迫委員、高橋委員、正木委員、渡邊委員、木村委員、林委員、蛭田委員、曾我委員、芳賀委員	
	<b>事務局</b>	新妻部長、赤津課長、鈴木主査ほかふるさと再生課職員	
	<b>トータルメディア</b>	丹治・中尾・宮澤	
	<b>記入者</b>	荒木	
<b>資料</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 第3回検討会議次第・委員名簿・席次表</li> <li>■ (資料1-1) 第2回検討会議における各委員の意見等を踏まえた「事業コンセプト及び事業展開イメージ」の修正点</li> <li>■ (資料1-2) 事業コンセプト及び事業展開イメージ</li> <li>■ (資料2) 第3回検討会議における論点について</li> </ul>			
<b>概要</b>			
<p>1. 開会</p> <p>2. 委員長あいさつ</p> <p>3. 議事 (協議事項)</p> <p>(1)事業コンセプト及び事業展開イメージについて(2)</p> <p>(事務局)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前回資料からの修正点について、(資料1-1, 1-2)に基づき説明した。</li> <li>○ 第3回検討会議の論点について、(資料2)に基づき説明した。</li> </ul> <p><b>※資料1-2(1頁)関係</b></p> <p>(委員A)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「危機意識や防災意識の醸成」(減災教育)に比重を置くことに関して違和感がある。</li> <li>○ 津波災害の視点からみると、「多くの人が亡くなってしまった→減災教育」という考え方になるため、表現がストレートすぎるのではないか。</li> <li>○ 災害のなかで原子力災害が一番大規模かもしれないと考えられるときに、いわき市として”原子力災害の減災教育の施設”をつくれるのか。いわき市特有の災害における減災教育の施設が論理的に成り立つのか疑問。</li> <li>○ 「震災の記憶の保存と継承」をメインにすることで、追悼・鎮魂を掲げることが可能であり、また減災教育にも活かすことができる。</li> </ul> <p>(委員B)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「震災の記憶の保存と継承」に重点を置き、そこから個々の項目に派生させる方が事業の展開がしやすい。</li> <li>○ メモリアルという観点から、いわきに何が起こったのかという詳細な記録を残すべき。残した記録のなかで、「この記録は減災教育につながる。こっちは地質学など学術的なアプローチができる」という具合で記録をカテゴリ化した展開の方法はどうか。</li> </ul> <p>(委員C)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「震災の記憶の保存と継承」と「危機意識や防災意識の醸成」のどちらにも比重を置かず、同列に考えても良い。</li> <li>○ 各業界が震災が起きた際に様々な施策や体制をとったことから、各業界の減災に対する取組みをひとつひとつ紹介するような教育施設的な要素を取り入れたい。</li> </ul> <p>(委員D)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「記憶や教訓を確実に伝承する」イコール「風化防止」につながるため、目的の「震災の記憶や教訓を風化させず、確実に伝承し、減災教育に活かす」にある「風化させず」という表現に違和感がのこる。</li> <li>○ 三つの視点については、優劣があるように思わない。</li> <li>○ 避難者受入れを原子力災害の二次的な現象として捉えることはできないか。</li> </ul>			

- 「震災が気づかせた未来への資源」については、事前の対策の必要性が痛感された経験をきちんと打ち出し、今後の備えにつなげる必要があることを含めた方がよい。

(委員長)

- 「震災の記憶の保存と継承」を核として掲げ、その結果として追悼・鎮魂や減災教育を展開する方法が良いと思う。
- 各業界の減災に対する取組みをひとつひとつ紹介することは難しいと思われる。
- 施設に減災教育的な要素を取り入れるとしたら、専門の研究者や防災関係のスタッフを設け、そこから様々な形で情報発信するという方法が良い。
- 避難者受入れは災害そのものではないが、いわき市にとっては災害に伴う経験として、他の場所と差別化を図る特有の経験として強調する必要がある。避難者受入れをどのように分類するか再考する必要がある。
- 目的にあるような「風化させず」という表現を使うと、災害が過去のものという印象になってしまう。災害は現在進行形であるということを主張すべきであり、別の表現がないか再考する必要がある。

(委員 E)

- ハードに落とし込む段階のことを考えると、「危機意識や防災意識の醸成」に比重を置くと現実的に難しいのではないかと。適切なプログラムやインストラクターを必要とし、体験的なコンテンツも含めて拠点スペースの半分を構成することは難しいのではないかと。
- 教訓を未来に伝えていくという視点で考えると、「危機意識や防災意識の醸成～減災教育」をメインに掲げることに賛成である。しかし、ハードとして具現化するうえでの課題がある。

(委員長)

- 「震災の記憶の保存と継承」を核にすると、保存していたものを見せる必要がある。小名浜のら・ら・ミュウのスペースより広い場所を確保したい。また、記録するスタッフが作業する場所、集めた資料を保存する資料室のスペースも必要。震災の経験を実際に体験できる場所として、仮設住宅もそのまま展示したい。

(委員 A)

- 減災教育というある程度イメージできる言葉が前面にきてしまうと、イメージが強すぎてその印象しか残らないのではないかと。
- 避難者受入れについては、いわき市としての特有の経験として整理する必要がある。

(委員 F)

- 危機意識や防災意識の醸成に比重を置くと減災教育的な方向性になるため、学校施設や教育施設のようなものができあがってしまうのではないかと。
- 避難者受入れは地震災害、津波災害、原子力災害と性質が少し異なるため、別に整理すると良い。

(事務局)

- 現段階で、防災施設をつくるという考えはない。「風化させず」という文言については変更する。避難者受入れについては、整理方法を検討する。

(委員 D)

- 事業推進の方向性(意識付け)の「現在進行形」という言葉と、目的の「風化させず」という言葉との時制が一致しない。意識転換を図るため、「風化させず」という言葉を現在進行形のニュアンスが伝わるような表現に変更すべき。

(委員長)

- 目的に現在進行形のニュアンスを盛り込むことに関しては賛成。事業の基本的な考え方について、震災の記憶の保存と継承を中心に置きながら、目的の「風化させず」という文言を現在進行形のニュアンスに変更することでどうか。
- 避難者受入れについては、原子力災害の中で単純に捉えるのではなく、別の位置づけで考えていきたい。

(委員 A)

- 避難者受入れという言葉自体を変えた方がいい。避難者という言い方に違和感がある。

(委員 B)

- 避難者受入れについては、いわき市は受け入れるだけの生活環境が整っていたから受け入れただけのことであるた

め、原子力災害の1つの派生項目でしかないと考えている。

- 受け入れた数が類を見ないものである。それについては非常に特異的である。離れざるを得なかった郷土から一番近く、生活条件も整っていたためと考えられる。

(委員長)

- 避難者がいわきにきた理由は、自分のふるさとに近いことと、精神的なところからいわきを選んだこともあると考える。
- 事業の方向性については、「いわき市特有の震災の記憶と教訓、復興への歩みを現在進行形として捉え、震災遺産とともに未来へつなぐ」のままで良いか。

(委員 G)

- 「特有の」という表現にすると、特有の経験のみ伝えて他の市町村と共通の点は伝えないということにならないか。また、特有なものそうでないものに分けられない気がする。
- 「特有の経験」を強調しない方が良いと思う。その他の経験を取り上げないと、危機意識と防災意識の醸成につながらない。
- 特有の経験に限らずとも、いわき市としてのメモリアル事業を特有のものにすることはできるのではないか。

### ※資料 1-2(2, 3 頁) 関係

(委員長)

- 市内の震災遺構を視察し、あらためて4年経って見たときに震災遺構と言えるものは殆ど顕著な形では残っていなかった。それらをつないでも中越のような形にはならないと思われる。
- メモリアル施設では、震災遺構を活用した震災の伝承と地域の復興に取り組む方々の活動をサポートするようなネットワークの土壌づくりの機能を担うのがいいと思われる。

(委員 A)

- 拠点施設については、さまざまな地区にこれからできあがってくるネットワークの中樞になるというところを意識してはどうか。
- ネットワークそのものを作るというよりは、ネットワークのハブになり、各地にある震災遺構の情報を提供する役割くらいで丁度いい。最初からネットワークの構築という文言を使わない方が良い。

(委員 D)

- 中越と同じような展開の仕方には無理がある。
- 拠点的な施設を整備して、いわきに起こった事柄を一つの施設で分かるような形が良い。また、情報センターの機能を付加してはどうか。
- 開館の時期も、いつごろをターゲットにするかによって中身のイメージが変わるため、時期的なものも考えていく必要がある。
- いわき市特有ということを出すならば、いわき市特有の複合災害を明確にしたうえで、それを理解してもらうような形の施設が良い。

(委員 E)

- 何が起きたのかを、いわき市の1つの会場で見えるような形にする必要がある。
- メインの会場にいわき市内の様々な遺構を紹介するコーナーを設け、それがネットワーク形成を助けるはたらきをする機能を持たせてはどうか。

(委員 G)

- 施設に情報センターのようなものを設置し、そこに震災に関するさまざまなものを収集・保存する機能を持たせてはどうか。
- 情報センターでは資料を収集・保存する人材がいてはじめて展示やその先の展開が成り立つため、情報センターをきちんと運営できる人的な配置と適した環境をつくるのが最初に必要である。

(委員 A)

- ソフトを展開する人材を含めた要素が整っていなければ現在進行形にはならない。1回つくて終わりにしないというところがコンセプトの中では非常に重要である。
- ネットワークを作ることに力を注ぐのではなく、ネットワークを最終的な目標として意識した中核施設を作った方が、結

果的に強固なネットワークができるのではないか。

(委員F)

- ネットワークの中核となる施設を作るとして、現在も行われている各地の取組みを記録したり、連携を図ることも意識していきたい。

(委員長)

- 各地の取組みを記録し、伝えていくことが地域の歴史形成を醸成することになるため、ひとつの施設で各地の取組みを伝えられるような機能は必要。また、取組みを記録し伝えるだけでなく、支援するような体制がとれれば尚良い。

(事務局)

- 目に見える形として残っているものだけでなく、震災後の活動など目に見えない部分も記録として残していくことも考えていきたい。

(委員長)

- コンセプトの中に、人のつながりとその中での地域に対する思い入れや熱意を強調するような表現を盛り込んでいくことはできないか。ネットワークという言葉よりも、結・連・絆という言葉の方がニュアンスとして近い。
- コンセプトに中核施設がどう機能していくのか、震災の記録を伝承していくうえで何が必要かという要素を加えたほうがいい。

(委員A)

- 言葉としてはネットワークで構わないが、ネットワーク自体を作るのではなく、中核施設がネットワークの中心になるという趣旨が伝わるような表現にした方がいい。情報発信の拠点、ネットワークの中心など。「ネットワークの形成・構築」という文言は再考の必要がある。

## ※その他

(委員D)

- 新エネルギーに着眼した展開として、震災後、いわきで何が変わったのか、どんな変化があったのかに焦点を当て、ビフォーアフターのような見せ方もできるのではないか。

(委員C)

- 中核施設は基本的に新築を考えているのか、何かの施設を利用してやるのかによってだいぶイメージが変わってくる。中核施設の議論をする前に事務局の考えを聞きたい。

(事務局)

- 整備の方法はいずれもあると考えている。財源については既存の施設であっても新築であっても対応できる目算はあるが、市街地に新築となると用地確保の点でハードルが高い。市街地施設のリニューアル、沿岸部への新築もしくはリニューアルでの整備になると考えている。

(委員C)

- 海沿いの場所に新築ということなら、豊間中学校の跡地辺りが適切である。施設の規模に制約がない。

(委員A)

- 施設の候補地を考えるうえで、アクセスが非常に重要になってくる。
- 施設自体は仮設でもいいくらい。仮設住宅というのはいわきの一番の特色であるため、それを実際に体験してもらうことができる。
- ある程度の面積も必要。これらを満たしたうえで、沿岸部などのふさわしい場所が適切である。

(委員長)

- 沿岸部にするとしたら、海が見えないような場所だと意味がない。内陸なら、かつての集落が一望できるような場所が適切である。

(委員G)

- 具体的な場所は思いつかないが、津波で被災した低地が見える高台がいい。そこに仮設住宅団地があつて、できれば一体の仮設住宅は壊さず残しておきたい。それに加えアクセスが良い場所が好ましい。

(委員長)

- 仮設住宅に関してはそっくりそのまま残しておくことは難しいため、2棟くらいを中核施設に持ってくるのが良いのではないか。
- 被害が大きかった海辺の場所が適切ではないか。毎月11日になったら海辺に来て手を合わせていく人がいると思われるので、慰霊(追悼・鎮魂)の方向につなげやすい。

(委員E)

- 沿岸部に何か新しい施設ができたとき、その周辺にも足を延ばせるため、観光サイドでの展開も可能である。

(委員長)

- 観光とのリンクを考えると、おのずと小名浜が適切ではないかと考えられる。しかし、候補地を考えるうえで観光をメインにしまうと本来の目的が崩れてしまうため、基本的な考え方をメインに候補地を考えていきたい。それに加えアクセスなども考えると薄磯、豊間辺りが適切ではないか。

(委員D)

- 沿岸部だと津波被害というイメージが強くなる。
- 海沿いは、避難や貴重なデータの保管保存という視点で考えたとき避けた方が良い。
- 仮設住宅の再利用に関しては賛成。
- 敷地が許すなら、横に防災緑地がありヘリポートや備蓄倉庫にもなるというアプローチの仕方も考えていきたい。

(委員長)

- いわき市は土地が不足しているという状況ではあるが、なるべく委員のみなさんの意向を反映できるよう、行政サイドで努力をお願いしたい。
- 事務局には、次回に向けて、事業の基本的な考え方と方向性など、本日の議論を踏まえて再検討をお願いしたい。

#### 4. その他

(次回会議について)

- 日時:9月16日(水)14:00～
- 場所:いわき市役所本庁舎 第8会議室

#### 5. 閉会

以上

〔署名〕

本村 拓郎

林 清